

なぜ、今「元町サポーターズ」なのでしょう

人懐っこいアメリカ人は、エレベーターで一緒になった見知らぬ人にも笑顔で声を掛けます。ビルの出入り口の手押しの扉は後方の人のために手で押さえてくれます。地下鉄が急停車して他人に少し触れただけでも、必ず「あら、ごめんなさい」と謝りますね。

こんなあたりまえの光景が日本から失われて何十年になるのでしょうか。戦後、背中を追いかけてきたはずのアメリカ人の日常のマナーでさえ、本来それを美徳としていた筈の日本人は何故、忘れてしまったのでしょうか。

89年に元町の住民になりました。その後6年半のNY駐在後に元町に戻ってきてみて、元町の良さを改めて痛感しました。横濱開港の際に、外国人居留地埋立てのために山手際の細長い土地に移住を強要されたひとびとは、山手と居留地を行き交う外国人向けの商売をここ元町で始めました。和菓子職人はパンを練り、馬具職人は洋家具を組み立て、陶工は洋食器を焼きました。元町にはその歴史に培われたオープンで気さくな風土が残っています。それは、長い外国生活で浦島太郎と化してしまった身を癒してくれるものでした。

ふとしたきっかけで、旧「仲通り会」の街づくりのお手伝いを始め、仲通り会の方々の街づくりにかける熱い想いに触れました。04年暮に「商店街振興組合 元町クラフトマンシップ・ストリート」(元町CS)の設立発起人の一人としての仕事を終えると、今度はドイツに転勤。08年秋に帰国したときには元町は見違えるように美しくなっていました。

改めて、元町CSに係わらせて頂きながら、今、日本の社会そのものに対して冒頭の感想を強くしています。帰国後の私の違和感は、共同体とともに失われた日本のコミュニティの喪失によるものではないだろうか。そう考えたとき、「余所者」の私にも常に温かい手を差し延べてくれた元町という街の懐の深さ、コミュニティとしての可能性の大きさを実感したのです。

「元町サポーターズ」の構想は、いまや日本中何処でも見られるコミュニティ再生の活動のひとつに過ぎないと思われるかもしれませんが、しかし、開港以来の歴史と文化をもった「元町らしさ」はきっとその活動に「独特の個性」と「深さ」を与えてくれると確信しています。というのも、街で触れあう見知らぬ人とも気軽に会話が交わせる…そんな街づくりを、こうした歴史と文化を背景に、元町CSが16年もの間続けてきたからに他なりません。

皆さんもぜひ、この新しい試みに積極的に参加してみてください。どんな小さなアイデアや提言ひとつでも結構です。それが次の世代に手渡しできるこの元町の貴重な財産のひとつになるのですから。

「元町サポーターズ」設立準備委員 成田良幹